

# 旧高取邸

Former Takatori Residence

## 能舞台を屋内にしつらえた炭鉱王の邸宅

佐賀県唐津市の旧高取邸は、明治～大正期の炭鉱開発で名をはせた高取伊好の邸宅。数寄屋風の邸内に能舞台があることや、併設された洋間に特徴があり、杉戸絵や欄間の意匠も秀逸である。能舞台は本格的な設備だが、座敷としても使用できる工夫が施されている。国指定重要文化財。



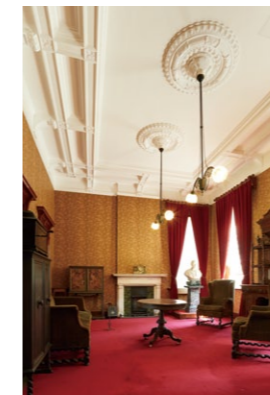
本格的な構造を備える大広間の能舞台。近代に私宅内につくられたものが良好に残されている例は少なく、貴重である。畳や敷居は可動式で部屋は座敷としても使用できる



演能の際には後座となる空間。杉戸に描かれた「蘭亭曲水図」は、詩歌を通じた交友を望んだ伊好の理想を反映したものとされる



2階の二間続きの大広間も接客用として使われた。欄間には孔雀の透かし彫りがあり、光が差し込むと壁に形が映し出される。北側の窓には唐津湾の眺望が広がる



漆喰天井や上げ下げ窓、紙貼りの壁などでしつらえた洋間



黒曜石を混ぜ込んだ「孔雀壁」が特徴の書斎。イタリア産大理石のマントルピースを配置した和洋折衷様式に時代の息吹が感じられる



正月など、家族の暮らしの中で格式の高いシーンに利用した中座敷。座と畳廊下の杉戸絵「楊貴妃図」が見える

高取伊好は江戸末期に儒学者の家に生まれ、幼少期に高取家の養子となった。その後、九州の炭鉱の近代化に寄与。多くの苦難に遭遇したが杵島炭鉱の成功などによって「肥前の炭鉱王」の名をほしいままにした。旧高取邸の主な建物は明治38(1905)年竣工の大広間棟と大正7(1918)年に新築された居室棟で、部屋数は34にのぼる。武家出身の伊好は豊かな教養を持ち、能をたしなんだことから大広間棟内に能舞台を設け、炭鉱事業の来賓や町内の人々に能を披露したという。能舞台は鏡板や橋掛り、後座、

地謡座を備える本格的なもので、音響効果を高めるために板床下の地面をすり鉢状に掘り下げたり、被り物を着けた演者に配慮して鴨居を高めに設置したりする工夫も見られる。この部屋は15畳の宴会用座敷としても使用したが、畳を外し、鏡板を敷居ごと後方にずらすと本舞台や後座に変わる。鏡板裏面には「蘭亭曲水図」の杉戸絵が描かれ、部屋の用途に応じて見せる面を入れ替えた。居室棟も数寄屋風で家人の暮らしの場だが、大玄関横には漆喰天井や輸入壁紙を貼った壁、アール・ヌーボー調のシャンデリ

アを特徴とする洋風応接間がある。また、和風の書斎にマントルピースを作るなど、巧みに西洋式を取り入れている。建築の近代化が進んでいた当時、資産家の間ではこうした和洋折衷様式が流行したという。「蘭亭曲水図」をはじめとする72枚の杉戸絵の多くは円山・四条派の絵師、水野香圃の作で保存状態は良い。孔雀などの吉祥文をあしらった欄間も随所に見られ、意匠にも見応えがある。敷地内には家族湯殿や昭和初期創建のワイン貯蔵庫も残っており、当時の暮らしぶりを伝えている点でも貴重である。

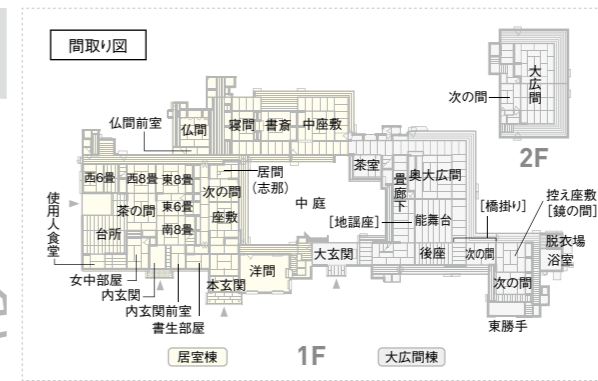
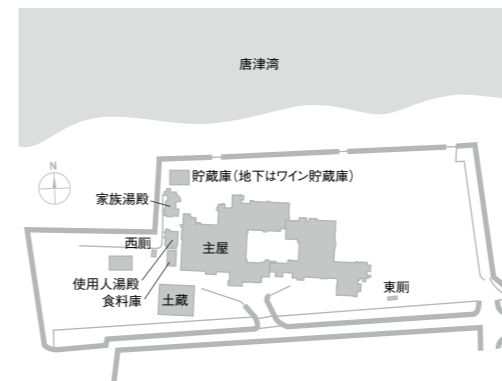
※現在のものは復原



居室棟(左)と洋間。洋間は基礎構造が木造の擬洋風建築で、組石に見える外壁はモルタルの洗い出し(下部3段は御影石)



大広間は観能時の客席であり、本舞台に畳を敷くと合わせて30畳の大座敷になった。欄間の「天香図」はモダンなデザインの動植物がモチーフ



用語説明  
 【鏡板】能舞台正面の「老松」が描かれた羽目板  
 【橋掛り】演者の通路となる廊下  
 【後座】囃子方(笛、小鼓などの楽器演奏者)や後見が座る  
 【円山・四条派】江戸中期に興った絵画の流派。円山応挙が開いた円山派と呉春の四条派の総称